

# 清国全権公使李鴻章略伝

岡本隆司(京都府立大学准教授)

李鴻章、字は少荃、安徽省合肥の人。1823年生まれ1901年没。1847年、数え25歳で科挙に合格して進士の学位を得、選ばれて首都北京のアカデミーに入った俊才である。

その任官してまもないかれに、転機が訪れる。1850年代の清朝中国は内乱の時代、太平天国や捻軍などの反乱勢力が長江流域・黄河流域を席卷し、李鴻章の故郷も危うくなった。清朝側は有力者に地元で自警団を組織させて対抗、李鴻章も帰郷して応戦する。ところが1858年、合肥が陥落、逃れた李鴻章は、曾国藩のもとに身を寄せ、その幕僚として仕えた。

曾国藩は李鴻章の学問の師、当時、故郷の湖南省で義勇軍を組織し、太平天国と死闘のさなかにあった。李鴻章はその信任をうけ、別働隊の指揮を命ぜられ、安徽で募った義勇軍を率い、1862年、上海に進駐、江南デルタを平定する。その武勲は高く評価され、以後も各地を転戦、華北・華中の捻軍を平定し、中国最大の軍権・財権を掌握した。

1870年に首都北京に近い天津に駐在する直隸総督兼北洋大臣に就任し、以後25年もの間、その任にあった。これは李鴻章の勢力が国防軍として頼られただけではなく、外患の時代とも重なったからである。かれの外交手腕は、群を抜いていた。

外敵のうち最も恐るべきは、意外なことに、わが日本である。李鴻章は幕末から急速に西洋化をすすめた近隣の日本を高く評価し、それゆえに軍事的脅威と位置づけ、近代化事業を推進し、北洋海軍を建設するなど、警戒を怠らなかつた。とくに安全保障上、重大な朝鮮半島が日清角逐の舞台となる。ソウルで衝突がおこるたび、李鴻章はたくみに事態を収拾して、日本の進出をくいとめた。

対立を深め、軍拡をつづけていた日清双方は、ついに1894年、全面的に軍事衝突した。日清戦争である。劣勢に立たされがちだった日本側が軍事力で挽回をはかったのだが、李鴻章が作り上げた陸海軍はあまりにも脆く、予想外の日本の大勝に終わった。

外交交渉を担当した李鴻章は、この敗戦の後始末も担わなくてはならない。かれは翌95年3月20日、清朝の全権代表として講和交渉のため下関にやってきた。交渉もはじまった同月24日、暴漢が帰路の李鴻章を狙撃、凶弾がその顔面をとらえたから、にわかには事態は緊迫する。李鴻章の身体は、かれだけのものではない。講和そのものの帰趨、おびたしい人命もかかっている。日本の軍医総監・佐藤進がその治療にあたり、みごとに快癒させた。4月に入って講和交渉は再開し、下関条約の締結にいたる。

負託にこたえた佐藤も立派だが、敵国の医師を全面的に信頼した李鴻章も大した度量である。そんな二人の間に、親交が生まれぬはずはない。その交誼は李鴻章が6年後に亡くなるまで、絶えることはなかつた。

下関条約以後も、日清はなお基本的に敵対関係だった。日本が戦争で獲得した遼東半島を還付させたロシアと清朝が親密だったからである。李鴻章は軍事力を失ったとはいえ、その親露政策をはじめ、なお清朝の外政を主導していた。しかしかれが1898年に失脚すると、内外の勢力バランスがくずれる。1900年には一大排外戦争の義和団事変が起こって、八ヶ国連合軍が天津・北京を占領した。

この破局にあたって、平和を回復すべく、翌1901年に列強との難渋な交渉にとりくんだのが、ほかならぬ李鴻章である。当年数えて79歳、老年の身には苛酷だったのだろう、9月に北京議定書を取りまとめると、その2ヵ月後に亡くなった。

佐藤進は同年の春にも手紙を出して、その身を気遣っている。同じころ、二人の交誼を記念する活人剣が可睡斎に建立され、李鴻章の詠んだ漢詩が刻まれたのも、何かの因縁なのだろう。反目しながらも、日本を重視し、決して戦争を望まなかつた李鴻章。活人剣の再建を機縁に、その事蹟をあらためてみなおしてみたい。